

令和4年度 第1回 学校運営協議会記録

1 日 時 令和4年5月19日(木)午前9時30分から11時

2 場 所 静岡県立沼津特別支援学校 会議室

3 出席者

(1) 学校運営協議委員

村本 幸雄 様 (元特別支援学校長)

池谷 修 様 (障害者支援施設沼津のぞみの里施設長)

越膳 徹 様 (有限会社イーリード社長)

草谷 修一 様 (沼特PTA会長)

杉山 真里 様 (沼津市児童発達センターみゆき所長)

芹澤 和代 様 (社会福祉法人長泉町社会福祉協議会会長)

梶浦 寛美 様 (清水町健幸づくり課主任)

(2) 本校教職員

校 長 青木 暁乃 副校長 所 康俊 教 頭 大石 真未

事務長 高木 伸明 小学部主事 井上みづほ 中学部主事 齋藤 夕紀

高等部主事 田代 美紀 教務課長 山本 愛花

4 内容

(1) 開会

ア 校長あいさつ・趣旨説明

・昨年度、学校評議員会から学校運営協議会に代わった。学校運営について、委員の方に了承を得て学校運営が始まる。このような活動を通して、コミュニティスクールに代わることで、学校と地域がお互いに課題を解決、共に前に進めるイメージがもてる協議の場としている。

⇒・了解を得て学校運営が始まるため、昨年度より1ヶ月前倒しになっている。

・学校教育目標「共に育てる自立と輝き」について、委員の方のバックボーンよりご示唆をいただき、より捉えを深めたり材料を集めたりして、今年の取り組みについて豊かにイメージしていく会議にしていきたい。

⇒その後第2回で中間経過についてご意見をいただき、第3回で評価をいただく

・学校運営協議会を通して、地域のインクルーシブにも本校も寄与できるかという視点も用いて評価していただけると、学校も地域もWin-Winの形で何かできるのではないか。

<令和4年度の本校>

・学区は1市2町 高等部3年生は、旧学区から通っている生徒もいる。

・全校生徒245人 適正規模に近づいている

・教職員の年齢構成 平均40.2歳 20代:19% 30代:30% 若くて経験年数が浅い教員が多い

⇒専門性の向上

・特別支援教育、教科の専門性は、経験を積んでいくことで向上させていく

・教員としての心構え(沼特マインド)の向上は、誰でもできる。『愛鷹山のあちらよ

りこちら』本校が1番であるという思いをもって進めていく。

イ 任命状伝達

ウ 自己紹介（学校運営協議会委員、本校教職員）

(2) 学校参観

(3) 協議等

ア 令和3年度学校教育目標、学校経営計画

＜校長より＞ 資料：学校経営計画書

・教育目標

自立⇒出口・社会に出る前の高等部だけでなく、それぞれのステージでできることを増やしていく

・取り組みの重点 「つながりの強化」（専門）

⇒入学～卒業後までのつながりを意識した指導の充実

・本年度の取り組み

（安全）教職員の人権感覚、児童生徒の防災教育、体制整備

⇒今年度より医療的ケアの児童入学に伴い、看護師が配置された。

（専門）一人1台PC導入によるICT機器の活用、卒業後の豊かな生活のための文化芸術、スポーツに触れる取り組み

（連携）地域の学校との交流、本校からの発信、ケース会議の実施

⇒今年度は、直接交流ができるようになっていく

⇒各学部一人コーディネーターの配置⇒校内支援の充実、校内の連携⇒進路指導にも力を入れて取り組みたい

（チーム）会議の焦点化、事務室との連携

・本校の課題

（安全）施設の老朽化、教室等の有効活用

⇒狭隘化は解消されたが…

（専門）指導の充実

（連携）切れ目ない指導・支援の体制

＜小学部より＞

・生活の基礎となる力をつける土台作り

・目を輝かせて、自分でやりたいと思って取り組む姿をめざしている。

・校外学習、校内宿泊、修学旅行を計画している。安全に行けるように考えていきたい。

・ICTを活用した授業

・東レアローズとの交流、演劇鑑賞を通して本物に触れる経験をし、子どもたちの気持ちを広げたい。

・交流の充実

・教員同士のつながり

⇒教員の得意分野や分掌を活かした学習会を通して、指導力を高め合っていきたい。

＜中学部より＞

・自分中心から周りに目を向けて、世界を広げていく活動に取り組んでいけるとよい。

- ・仲間と一緒に生活経験を広げていくなかで、自分の好きなこと、苦手なことを知る。
- ・いろいろな経験を重ねていく中で、自分で決める、自分で考えるという力をつけていきたい。
- ・気持ちが揺らぐ時期だが、自分らしく大きくなってほしい。
- ・自分で頑張れることを見つけていけるとよい。
- ・3年間かけて防災教育に取り組みたい。
⇒自分の命を守る、地域の安全を確認する
- ・本物に触れる体験を通して、将来自分が楽しめるものを見つけていけるとよい。
- ・直接交流をしたり、地域の方にも頑張っているところを見てもらったりしたい。
- ・中学部全体で生徒を育てていきたい。

<高等部より>

- ・小中と積み重ねてきた力の幅を広げる、さらに経験を積み重ね、主体的に進路を決定できるようにしていく。
- ・自分で選び、自分で決めていくことを大切にしていきたい。
⇒考えるための材料を用意していく。
- ・失敗することもあるかもしれないが、やり切って満足できるようにしていく。
- ・高等部卒業後の日常生活を営む力や働き続ける力をつけていきたい。
- ・生活年齢に応じた関り方、スクールカウンセラーや医療機関とも連携をして対応をしていく。
- ・地域の方と日々つながりをもてるような学習を行う。

イ 質疑・応答

Q1：保護者からこの先の不安をよく聞く。保護者との連携の面でも、進路のつながりが視覚的に分かりやすいものを掲示してはどうか？（支援事業所、放デイの情報、A型B型事業所の違いなど）進路に関する情報が少ない。保護者のなかには、パンフレットが置いてある場所があることを知らない人もいる。

A2：コロナ渦でもあり参観の機会も減っている。これまでは子どもたちを中に入れて、どう教育活動をしていくかという視点で場所の作り方を先生たちがしていたが、ゆとりがでてきたら、掲示を含め、共に育てるという部分を考えていきたい。

Q2：企業が、障害者雇用を進めている。例えば、大学では、企業に採用情報を聞き学生に伝えていることも行っている。特別支援学校では、そのような外への働きかける手段を。進路について、待っているだけでなく、積極的にすることが自立にもつながるのではないか？

A2：職場開拓員の配置も今後される。職場実習を行いながら実習先、就労先を開拓していったらいい。先生方も電話や職場を訪問して職場開拓をしている。会社の中ですきまの仕事や会議の準備を組み合わせるなど、様々な形での雇用が行われている。職種にとらわれず、様々な会社で雇用ができないかということで取り組んでいる。

Q3：町での相談で、台風の時期にろうそくや水は何本用意したらよいかということ質問される。学校での防災教育を丁寧に行ってくれているので助かる。

- ・スマホのトラブルは、小学校中学校と同様にあると思う。ICTの活用の中で、そう

いったトラブルにならないように意識して行ってもらえるとよい。

A3：学校で取り組んだことを家庭に返すことを大切にしている。しかし、地域の防災訓練に入ることに難しさを感じている。

- ・藤枝特支では、地域の訓練の日を授業日とし、教員も一緒に参加することで保護者も少し安心して参加することができた ということもあった。

ウ 意見交換

<委員から>

- 保健センターで発達相談をしながら就学支援委員会にも関わっている。元々精神科の看護師だった。全般的なケースの調整を行っている。
町からも沼特に多くの子が通っている。ワクチン会場で会うと、「最近どう？困っていることない？」と声を掛けている。地域でできる相談事と専門的な相談の区分けができるように、地域で生活できる基盤を作れるように意識している。
- 町で民生委員を12年行っていた。特別支援学校と関わることは初めて。先生方の連携や子どもたちからエネルギーをもらった。
自分自身器楽演奏チームの代表もしていて、ボランティア演奏を行っている。
- 今年度より施設の長となった。10年前に勤めていた時は、地域支援の担当だった。公立なので、保育士は施設に来て初めて療育に携わる。学校と同様若い職員が多い。どのように研修をしていくかが課題。職員を含めて沼特と交流できるとよい。
- PTA会長をしている。コロナ渦であまり活動ができなかったが、今年は活動ができそう。様子を見ながら行っていきたい。
重度のお子さんを受け入れる生活介護事業も始めた。放デイ、運送会社も行っている。愛鷹分校の生徒を採用して4年。勤務を続けている。
- 事業所はサービス業であるが、障害者雇用も行っている。グループでは、就労支援や職業訓練の受託も行っている。キャリアコンサルティングという立ち位置からすると、実習先の開拓から就職に結びつけることの難しさなど、先生方と共感できるところもある。
自己理解の授業を行っていた。第11次の職業能力開発基本計画のお触れが出た。キャリア形成支援が叫ばれている現在、私たちもより深く理解していく必要がある。社会に出て離職するケースや上手く適応できないケースが増えているが、自己理解不足が要因のひとつにある。どこで働くかの前に、自分がどんな特性をもっているか、自分が何者なのかを知る必要がある。障害者だけでなく、健常者もどうようである。社会構造や経済構造が難しくなっているが、働くことも人生の一部だという教育を経営案の中に盛り込んであるので、活用させてもらいたい。
- 入所施設作らない、グループホームは軽度の方なので、重度の方の住まいが足りていない。県の調査では、1,000人程度。20都府県は調査をしていない。強度行動障害の方、介護度の高い方の支援が課題。国は入所施設を作る補助金を出すことを渋っている。
瀬戸内寂聴「忘己利他」己のことを忘れて人様のことを考えるという言葉。人と人の

間に幸せがある⇒他人を意識する、他人に認めてもらうことが幸せにつながっていく。養護学校時代に集団参加を第一の目標にしている、いろいろな変遷があったが、どの学部でも集団参加という言葉が入っている。これからも意識していかなければならない部分。その中で、心の動き（やりたいことを見つける、自分の気持ちを伝える、仲間を思いやる気持ちなど）を目指す児童生徒像としてあげているので、大切にしていって欲しい。

自己決定支援ガイドライン 保護者含め、支援者は安全を優先して先回りして支援をしてしまう。失敗が許されないことが増えている。あまり先回りせずに、失敗の経験から意思決定、自己決定の視点を教えることも必要。

○子どもたちの笑顔があふれる、学校に来ることが楽しいと思う姿を願う。

エ 「目指す学校像」について承認

(4) 閉会